

甲南女子大学における AO 入試に関する現状と課題

池田 太臣¹⁾・伊藤 実歩子²⁾・山田 尚子³⁾
佐伯 勇⁴⁾ (TF 調査チームメンバー)

はじめに

本学では、現在、教育の質の向上を目指して、さまざまな取り組みが行われている。こうした試みは、総称して FD (Faculty Development) と呼ばれている。

大学設置基準法第 25 条によれば、FD とは「授業の内容および方法の改善を図るための組織的な研修および研究」を指すが、その内容は、大学によってさまざまであろう。

今回、本稿で紹介するのは、本学の FD 組織下の組織である「全学 TF 調査チーム」によってまとめられた『2009 年度 全学 TF 調査チーム報告書 本学の入試・教育に関する 5 つの提言』(2010 年 3 月 19 日、以下『報告書』と略)からの一部抜粋である。

「全学 TF (タスク・フォース) 調査チーム」は、全学的な FD 活動の支援のために、2009 年 11 月 1 日に発足した。その課題は「現在学内で行われている各種調査を関連付け本学のさまざまな改革・改善に必要なデータを作成・管理する。このほかシラバスの形式や授業評価アンケート項目の検討も必要に応じて検討する」とされている(2010 年 3 月 11 日 内部資料「全学 FD について」)。

活動 1 年目にあたる 2009 年度では、「『入試方法』と『入学後の学生の成績』とを関連づけて分析し、今後の入試のあり方に提言を行うこと」を課題とした。この課題は、先に紹介した『報告書』において、一応の成果を出すことができた。

本稿では、この『報告書』のなかから、AO 入試に関する本学の現状を紹介し、その課題を明らかにすることを目的としている。AO 入試は、第 1 章第 2 節で

述べるように、現在の大学入試制度の問題点の一つとして取り上げられているからである。

ただ、元となる『報告書』は、あくまで内部資料として作成されたものであり、そのすべてを公表することはできないし、また公表すべきでもない。あくまで、本稿の目的は、本学の FD 活動を学外に示すことと、情報を広く共有してもらい、よりよい教育のための議論の土台となることである。

第 1 章 本学における成績評価の方法と入学試験の現状 ——GPA と AO 入試——

本章では、以下で検討される「入試方法」と「入学後の成績」に関する分析の前提として、GPA という成績評価の方法の概要を述べる。その上で、本学において GPA と AO 入試を導入した経緯及び課題を概観したい。

1. GPA の導入と課題

(1) GPA とは

文科省によれば、GPA とは、アメリカにおいて一般的に行われている学生の成績評価方法のひとつであるとされ、次のように取り扱い例を紹介している¹⁾。

①学生の評価方法として、授業科目ごとの成績評価を 5 段階 (A, B, C, D, E) で評価し、それぞれに対して 4, 3, 2, 1, 0 のグレードポイントを付与し、この単位当たり平均 (GPA, グレード・ポイント・アベレージ) を出す。

②単位修得は D でも可能であるが、卒業のためには通算の GPA が 2.0 以上であることが必要とされる。

¹⁾文化社会学科

²⁾総合子ども学科

³⁾心理学科

⁴⁾文化社会学科

③3セメスター(1年半)連続してGPAが2.0未満の学生に対しては、退学勧告がなされる。(ただし、これは突然勧告がなされるわけではなく、学部長等から学習指導・生活指導等を行い、それでも学力不振が続いた場合に退学勧告となる。)

なお、このような取扱いは、1セメスター(半年)に最低12単位、最高18単位の標準的な履修を課した上で成績評価して行われるのが一般的となっています。

平成9年度あたりからこの制度の導入について大学審議会などで議論が見られるようになった。その後、導入する大学は国公立とともに着実に増加傾向にあり、平成19年度にはおよそ4割の大学がこの制度を実施している。ただし、GPAは学修指導(210大学)、奨学金や授業料免除(204大学)の基準として用いられており、進級判定(45大学)や卒業判定(28大学)の基準として踏み込んだ利用は少数にとどまっている³⁾。

(2) 本学におけるGPA導入の経緯

本学においては、平成13年の教務委員会でその導入が検討され、その後教授会の承認を得て、平成14年度入学生よりGPA制度の導入が決定された。その目的は、「GPAにより席次の算出方法を学内統一し、学修指導及び奨学生の選考等に運用することが目的である」とされた⁴⁾。ここで確認されたように、現在においてもGPAは、席次、奨学金や授業料免除の基準として用いられており、上記文科省の調査における利用方法の前者に相当する。

本ページの一番下に掲げたのは、本学の学生要覧にあるGPA制度に関する説明である⁵⁾。

2. AO入試の現状と課題

——先行研究と本学の動向——

(1) AO入試の現状

大学審議会では「大学入試の改善について」(2000年)において、AO入試を「学力検査に偏ることなく、詳細な書類審査に時間をかけ丁寧な面接などと組み合わせることによって、受験生の能力・適性や学習に対する意欲、目的意識等を総合的に判定しようとするきめ細やかな選抜方法」と解説している⁶⁾。

日本におけるAO入試は、1990年度入試で慶応大学湘南藤沢キャンパスの総合政策学部と環境情報学部とで最初に導入された。その後、徐々に導入する大学が増え、2000年度入試では75大学、2009年度入試では国立43大学、公立22大学、私立458大学が実施し、国立大学の5割、私立大学の7割以上がこの入試方法を使用している。

夏目によれば、AO入試の急速な普及は、まず、初等・中等教育におけるいわゆる新しい学力観に立つ、「知識・理解」よりも「関心・意欲・態度」を重視した教育政策が大きく影響しているとする。その点から、学力だけではなく、意欲や関心を評価しようとするAO入試が期待されたのである。次に、夏目は、入試に関する諸規制を緩和して、学生募集に関わる大学間競争を促進する狙いを大学政策の観点から指摘している。AO入試には、法令上の規定はなく、募集人

GPA (Grade Point Average) について

GPA (Grade Point Average) とは、成績評価の平均を数字で表したものです。主に個々の学生の学習指導に使われますが、奨学金や認定留学生等を選考する際の資料としても活用します。

GPA による評価 (ポイント) は、履修登録した全科目のうち失格 (F) となった授業科目を除く残りの授業科目が対象となります。不合格科目が多い場合は、全体の評価が下がります。

GPA による評価 (ポイント) は、次の算出方法で計算されます。

①ポイントの付与

AA・・・4

A・・・3

B・・・2

C・・・1

D・・・0

F (失格) は除く

P (認定) は除く

②GPA の計算方法

$$\text{GPA} = \frac{\text{AA の科目ポイント (4)} \times \text{単位数} + \text{A の科目ポイント (3)} \times \text{単位数} + \text{B の科目ポイント (2)} \times \text{単位数} \cdots}{\text{履修登録科目単位数 (ただし、失格は除く)}}$$

履修登録科目単位数 (ただし、失格は除く)

員の比率等の規制は設けられていないことが、その普及を押し広げたと考えられる⁶⁾。

このような AO 入試を利用して入学した学生の学業成績や大学生生活全般に関して、国立大学を中心とした調査研究が行われている。その主なものとしては、AO 入試で入学した学生は、意欲を持って入学する、大学の行事などに積極的に関与する、大学生生活の総合的な満足度が高い、入学後の大学生活への適応がスムーズである等の傾向が見られたというものである⁷⁾。

それに対して、近年、メディアなどでも批判の対象とされているのが、大学の学力不問の学生獲得方法として用いられている AO 入試である⁸⁾。全国で 40% 前後の大学が定員割れを起こしている現状から、AO 入試および推薦入試入学者数が約半数を超える大学は近年では珍しくない。上述したように、入学者数の比率等の規制がない AO 入試は確実な学生募集の手段として運用されている実態がある。

では、AO 入試に関係する当事者（大学の教員）たちは、この入試方法についてどのように考えているのだろうか。

まず、AO 入試の問題としてあげられていることが、①国立大学では「教員の負担」（71.4%、私立 45.3%）であるのに対し、②私立大学では「合格者の入学までのモチベーションの維持」（71.3%、国立 30.5%）であるのが興味深い⁹⁾。

①に関しては、国立大学において、負担が大きいにもかかわらず、望むような合格者が得られなくなったとして、筑波大学国際総合学類や鳥取大学工学部のように AO 入試を取りやめるところも出てきた¹⁰⁾。

②に関しては、上記の国立大学を中心とした調査研究では、AO 入試による入学生が意欲的であるという傾向が私立大学には該当しないということになるのだろう。後述するように本学に限定すれば、私立大学の傾向は該当しないと言えるのだが、上述の入学定員の半数が AO 入試および推薦入試によるものという大学ではそのような傾向があるだろうと想像できる。とはいえ、多くの大学が、多様な入試の中から第一志望ではないところへ入学してきた学生の意欲の向上への対応・指導に苦慮している実態を考えれば、この問題は AO 入試だけではなく、大学へ何のために入学するのか、その目的意識の形成を担う高校とそれを受け教育する大学それぞれの教育のあり方を問い直さなければならないことを示唆している。

(2) 本学における AO 入試導入の経緯

さて、次章より本稿の主題である分析に入る前に、

本学の AO 入試導入の経緯と現在の問題点を簡単におさえておきたい。

本学では、AO 入試導入の全国的な流れを受けて、学力以外の能力や特性を持つ多様な学生を確保するために、2002 年度、心理学科を除く 7 学科で実施、翌年 2003 年度には全 8 学科で開始された。その前年度にはこの AO 入試の原型ともいえる面接型の入試（推薦入学選考 C）を 3 学科で導入している。2002 年度では AO 入試と並行して 4 学科においてこの入試が実施されたが、2003 年度には廃止し、AO 入試に一本化した。また、2007 年度入試では AO 入試を A 日程 B 日程の二回行った。なお、2007 年度に看護リハビリテーション学部が新設されたが、AO 入試は実施していない。

また、平成 20 年中央教育審議会答申において、大学に多様な入試を求める一方で、学力を担保する入試を求め、AO 入試の出願要件などの改善ポイントが示されたことを受け、本学では平成 23 年より評定平均値 3.0 以上を出願の条件とすることになった。

AO 入試によって入学する学生数は、いずれの年度においても導入時より一貫して入学者数の 1 割未満であり、第 2 章の図 1 にあるように、導入時より現在までの平均値は 6.3% である。したがって、本学の AO 入試制度は、現在のところ定員確保のための装置として機能するものではない。

次章以降の分析から明らかなように、AO 入試による入学者の学力が他に比べると低い傾向がある一方で、彼女たちが大学での授業や行事に積極的に参加していることもまた普段の姿から実感できることは、これまでの先行研究と同様の結果である。

問題は、本稿のまとめでも繰り返されることではあるが、AO 入学者への評価が、GPA という一元的なもので測られてよいのかということである。彼女たちの授業への参加度、ゼミナールでの熱心な研究活動の実態は GPA で測定できないものであることは明らかである。いうまでもなく、このような問題は AO 入試による入学者に限られたものではない。すべての学生が何を学び、どのような能力を持っているか、そして持つようになったかを評価する方法の改善（入試の方法や授業改善も含めて）が大学の質保証の中で語られるべきである。以下の分析は、このような問題をわたしたちに提起するものである。

第2章 本学におけるAO入試の 現状と入学後の成績推移

1. 入試方法と入学者数

以下に掲げる図1は、現行の入試制度がほぼ整った2002年度からの入学者数の推移を、入学年度及び入試方法別に示したものである。入試方法についてはAO入試、推薦入試、一般入試(大学入試センター試験利用入試を含む)の3つに分類した。

すでに、第1章で指摘した通り、入学者数の比率等の規制がないAO入試は、確実な学生募集の手段として運用されているという実態があるようである。しかし本学では2007年を境として、推薦入試による入学者数の比率が増えてきたのは確かであるが、AO入試による入学者数は常に1割を越えることはなく、安易な学生募集の手段として利用されているわけではないことがわかる。

文科省が平成22年10月1日に発表した、「平成22年度国公立大学・短期大学入学者選抜実施状況の概要」によれば、平成22年度に私立大学に入学した学生のうちの10.5%がAO入試入学者であった。この数値と比べても、本学のAO入試入学者数は多いとはいえない¹⁾。

2. 入試方法別・入学後の成績

入試方法と入学後の成績という視点から、在学中のGPAを比較してみると、AO入試入学者は必ずしもよい成績を修めているとはいえないのも確かである。

図2は、4年次までの通算GPAデータが有効である2002～2006年度入学者について、入試方法別にGPAの分布を見たものである。なおここでは、通算GPAを計算できない中途退学者のデータは除いている。入試方法によって、GPA7段階ごとの人数比には有意差があり、一般入試、推薦入試、AO入試の順

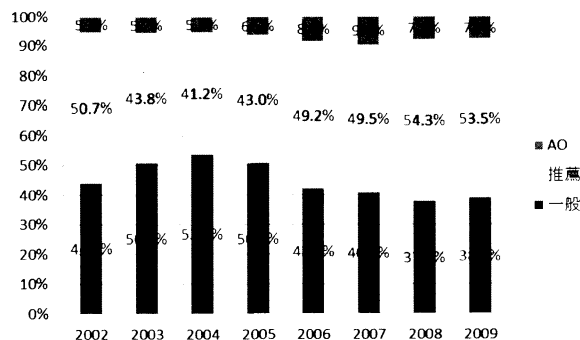


図1 入試方法別・入学者の比率の推移(2002～2009年度)

に、GPAの高い層の人数が減少し、GPAの低い層の人数が増加していることが分かる。

3. 入試方法別・GPAの推移

続いて、4年間でのGPAの推移を見てみよう。図3は図2で集計の対象とした2002年度から2006年度の入学者の各年次GPAを入試方法によって比較したものである。

なお、各年次のGPAの平均は、その学年のうちに取得した科目のGPAのみを対象として計算している。つまり、たとえば2年次のGPAは、2年次で取得した科目のGPAの平均である。1年次から2年次に至るまでに取得したすべての科目のGPAの平均ではない(このような場合は「通算GPA」と表現している)。

この図3から、一般入試による入学者が高い水準を保ったまま推移していることがまずわかる。他方、AO入試による入学者のGPAは他のグループより低い水準にはある。しかし、年次推移の形は他のグループとほぼ同じであり、しかもグループ間の差は年次が上がるほど縮まる傾向にある。AO入試による入学者も、他の試験方法による入学者と同じように成績が伸びているのは、本学の教育の成果であるといえよう。

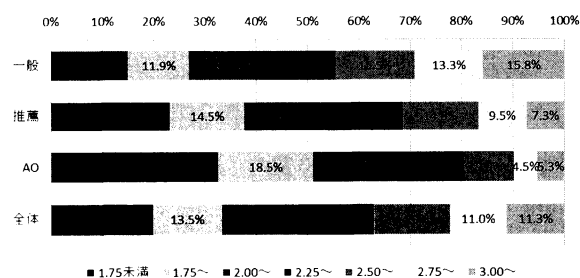


図2 入試方法別・GPA7段階の比率

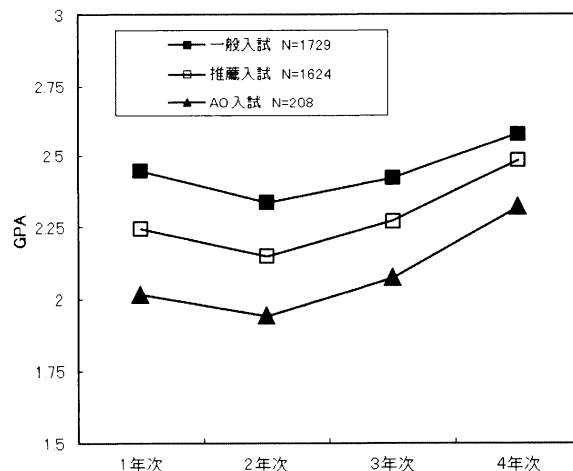


図3 入試方法別・GPAの年次推移(2002～2006年入学者)

1 年次での GPA の差が 4 年次で小さくなることについては、以下のような理由も考えられる。

1 年次や 2 年次では、教養の科目や講義科目が多くテストが多いため、知識の量を中心とした「学力」的な差が付きやすい。しかし、3 年次、4 年次になると、実習系の科目や演習形式の科目が増えてくる。それらの科目においては、「学力」的な能力だけでなく、各専門分野に固有の能力、あるいは批判的、分析的、総合的、論理的等々の能力が評価される。その結果、学年が進むにしたがって、教育の成果として GPA の差が縮まってくるというわけである。

それ以外にも、いずれのグループも 2 年次でやや GPA が下がる、という現象が見て取れる。

これは、日本の大学の一般的な傾向とも合致する。2 年次になると、入学当初あったモチベーションがなくなり、学びに対する意欲が失われるといわれている。こうした学生側の姿勢のみならず、カリキュラムの問題もある。1 年次には初年次教育という形で、とにかく手を掛けて一人前の大学生に育てようとする傾向がある。3 年次はゼミが始まり、学生への配慮も再び手厚くなる。しかし、その間の 2 年次は、どちらかといえば、「放置」される傾向にある。以上の理由から、2 年次は、学業成績が低下するといわれている。

その一般的傾向が、今回、GPA の平均が下がるという形で確認された。そのため、本学でも本格的に「2 年次教育」を考えていくことが必要であろう。そうすれば、2 年次の落ち込みが緩和され、その後の成績はさらに上昇すると推測できる。「2 年次教育」の充実、は、本学の課題のひとつであるといえる。

第 3 章 今回の分析の問題点

すでに指摘したように、AO 入試入学者の GPA は概して低く、一般入試入学者は高い傾向がある。とはいえ、実は、この結論には大きな問題がある。

まず、AO 入試で入学した学生への評価方法として、GPA をつかっていることである。AO 入試は、その理念としては「いわゆる『学校的な成績』ではない、学生の能力」を評価する入試制度である。そういう建前で入学させているにもかかわらず、それらの学生たちをまたしても GPA という「学校的な成績」で評価するのは、やはり適切とはいえない。

AO 入試で入学してきた学生たちは、たとえばボランティアを一所懸命しているとか、オープンキャンパスに積極的に参加して、自分の能力を発揮しているこ

ともあるかもしれない。そのような学生の「質」の部分は、GPA に注目するだけでは、把握することができない。

ここから、新たな課題が指摘できる。つまり、評価方法として、GPA 以外を工夫する必要性である。

また、どのような学生であれ、その学生の能力を伸ばすことが、大学の社会的使命である。多様な学生がいて、それぞれが持つ能力を発揮する場面があり、それを多面的に評価する方法があり、その結果、学生たちが「自分の成長」を実感でき、自己肯定感を強める。こうした教育ができてはじめて、学生たちの大学への満足度もあがる。だから、現実には AO 入試で入学してきた学生たちがいる以上、その学生たちに相応しい教育を模索すべきであると考えている。

「全入の時代」と言われて、学生の質が問題となるようになって久しい。もう「学生の質が…」と嘆く時代は終わった。時代の変化を受け止め、われわれ自身も変わっていかなければならない時期に来ているのである。

注

- 1) http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/003.htm
- 2) http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/21/03/1259150.htm
- 3) 「甲南女子大学教務委員会議事録」平成 13 年 1 月 17 日より。
- 4) 『甲南女子大学学生要覧』2010 年、p.28。
- 5) http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_002.pdf
- 6) 夏目達也「AO 入試の現状と課題」『IDE』2002 年 10 月号、p.21。
- 7) 山岸みどり「北海道大学 AO 入試の追跡調査」『大学入試研究ジャーナル』第 16 号、pp.197-203、福島真司、清水克哉「AO 入学者が過ごした 4 年間 - T 大学 AO 入学者全員面接調査 (1 期生 4 年分) から -」『大学入試研究ジャーナル』第 19 号、pp.25-31 など他多数。
- 8) 例えば、「特集 本当に強い大学 選抜機能を失った大学入試 高大接続テストは特効薬か」『週刊東洋経済』2010 年 10 月 16 日号、pp.48-51、「特集 壊れる大学 大学ルポ・生き残り大作戦」『週刊ダイヤモンド』2010 年 9 月 18 日号、pp.52-55。
- 9) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo/3/siryo/08030317/002/001/011.htm
- 10) 「特集 壊れる大学 大学ルポ・生き残り大作戦」『週刊ダイヤモンド』p.54。
- 11) 文部科学省「平成 22 年度国公私立大学・短期大学入学者選抜実施状況の概要」平成 22 年 10 月 1 日
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/10/1297952_1532.html